

われわれにとって気候変動とは何を意味するのか

医療生態学の視点から考える

山本太郎氏

長崎大学熱帯医学研究所国際保健学分野教授



やまもと・たろう

1990年長崎大学医学部卒業。博士(医学・国際保健学)。京都大学医学研究科助教授などを経て現職。アフリカ諸国、ハイチなどで感染症対策に従事。著書に、『新型インフルエンザ 世界がふるえる日』(岩波新書)、『国際保健学講義』(学会出版センター)など。

(ハイチ地震緊急援助隊の宿舎にて)

気候変動がなぜ医学・医療の課題となるのか、長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎氏に尋ねた。同氏は、気候変動とは健康被害を伴う強烈な環境変化であり、それは社会的・経済的に弱い立場にある人々を狙い撃つと、医療生態学的視点から指摘する。

「健康」とは環境への適応の度合い

一気候変動はなぜ、医学・医療のテーマとなるのでしょうか。

医療生態学から見ると、健康とは環境への適応の度合いとすることができ、気候変動だけでなく環境に大きな変化が生じれば、それはわたしたちの健康に影響を与えます。影響は理論的にはポジティブなものもネガティブなものもあるのですが、一般的にはネガティブである場合が多いようです。それは、わたしたち人間が、環境へ適応しようとする行動様式を持っているからだと思えます。

近年、狩猟・採集社会はわたしたちが想像するよりはるかに健康的な社会であったと考えられるようになりました。何十万年にわたって適応を果たしてきた結果かもしれません。ヒトが罹患する病気の種類と頻度を増加させたのは、農耕の開始とそれに伴う定住、人口増加でした。農耕の開始という環境変化が疾病を増加させたのです。気候変動にも同じことが言えると思えます。そして最も重要な点は、気候変動という環境変化が非常に速さで起こっていることです。環境変化がどのようなものであると、速い環境変化に適応することには大きな困難が伴います。

一医療生態学とはそもそも、どのような学問なのでしょうか。

生態学とは環境と生物の相互作用を主題とする学問で、両者の関連から医療を考えるのが医療生態学です。この視点からは、文明が持つ疾病のレパートリーという考え方も可能になります。例えば、ヨーロッパの文明圏では、麻疹や天然痘が頻りに流行していました。そのため、文明の構成員はそれらに対し、集団としての「免疫」を保持していたのです。ところが、南米の先住民の文明圏は天然痘を持たなかった。その結果、スペイン人がこの疾病をもたらしたとき壊滅的打撃を被りました。そうした因果関係を考えるのにも役立ちます。

気候変動は「弱者」を最初に襲う

一大きな環境変化をもたらす気候変動は、現在の疾病レパートリーを変えてしまふかもしれませんね。

そうした可能性も否定できません。IPCC*とWHOは、気候変動による直接的健康被害として熱波による熱中症の増加、間接被害として水・食物媒介性感染症や節足動物媒介性感染症の増加などを挙げています。また、干ばつ、洪水など気候変動による大規模災害も深刻な健康被害をもたらす可能性があります(図)。

生物はこうした危機に対し、遺伝的または文化的な適応行動を取ります。遺伝的適応にはおそらく数千年が必要で、気候変動のスピードはこれを許さないでしょう。一方、人間は文化的適応が可能です。それさえ間に合わないかもしれません。

一日本は、気候変動による健康被害に対応できるのでしょうか。

日本を含む先進国は、文化的適応で対処できる部分もあるでしょう。例えば、温暖化によるハマダラカの生息域拡大だけで、日本においてマラリアが問題化することはないはず。逆に発展途上国は、文化的適応を行うのに十分な社会基盤、経済力がありません。気候変動で最初に影響を受けるのは、弱い国の貧しい人々です。

今年1月、わたしはハイチ地震*の緊急援助活動に参加しました。マグニチュード7.0の大地震でしたが、もし先進国であれば、これほど大きな被害は受けなかったはず。災害時には格差があらわになると言いますが、気候変動も同じだと思います。

医療は人命にかかわる格差を許さない

一社会的、経済的弱者の生存が脅かされるのが気候変動の影響だと。

人間だけの話ではありません。よく生物多様性*と言われますが、気候変動はホッキョクグマ*など多くの種を絶

滅に追いやります。生態系は、多様な種の存在でresilient(回復の早い)システムとして機能します。ある種が消えたとき、それが占めてきた生態学的地位の空白がどんな事態を招くか、誰も予測できません。

2006年、コンゴ共和国ロッシ保護区のニシローランドゴリラがエボラ出血熱で大量死しました。ゴリラなどの霊長類が絶滅に向かうと、そこに寄生するウイルスなどは新たな宿主を探そうとするかもしれません。ヒトがその標的となる可能性もあると思えます。ゴリラの絶滅は、人類の危機に結び付きます。

一そこで医療従事者が果たすべき役割は何でしょうか。

温暖化か寒冷化かの議論は専門家に任せたいと思えますが、現在の地球にはこれまでの人類史に登場した総人口の5分の1が暮らしています。それが地球に相当の負荷をかけていることは確かです。気候変動の問題は、人間の生き方、他の生物とのかかわり、地球との付き合い方の再考を迫ります。近代からの産業化、成長路線を考え直す好機かもしれません。

人命にかかわる医療は、「貧しいから仕方ない」とは言えません。先進国の医療従事者には、途上国の人々と一緒に、こうした問題を考えていく姿勢が求められていると思えます。

*IPCC
気候変動に関する政府間パネル

*ハイチ地震
2010年1月12日、ハイチで起きたマグニチュード7.0の大地震。首都ポルトープランスを襲った直下型地震で、死者22万人という空前の被害を与えた。山本氏の報告は「世界」2010年4月号に掲載されている。

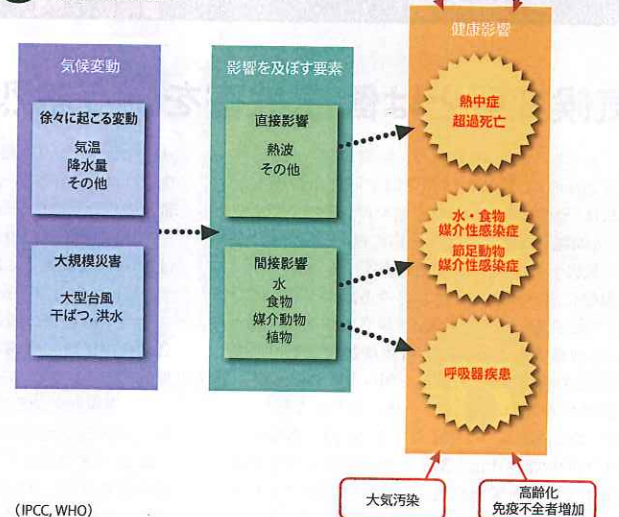
*生物多様性
地球全体または生態系において多様な生物が存在すること。IPCC第4次評価報告書では、1.5~2.5℃の気温上昇で調査対象の動植物の2~3割が絶滅リスクを高めると予測されている。



生活基盤整備(上下水道) 社会衛生基盤 医療行政 科学の発達

海外旅行(ヒトの移動) 貿易(物資の移動)

図 気候変動と健康



(IPCC, WHO)